

関  
秘  
録

和書門			
一八七九三	一三	八四	八
類	號	函	架
冊	架	函	冊

内閣文庫			
二	一八七九三	一	和
二	九	一	書
函	三	九	冊
架	冊	架	架

漫筆

内閣文庫	
番號	和 18793
冊數	8 ( 8 )
函號	211 292



一 菅原公角筆之書  
一 冠卷帽下之書  
一 冠卷帽下之書  
一 冠卷帽下之書  
一 冠卷帽下之書  
一 冠卷帽下之書  
一 冠卷帽下之書  
一 冠卷帽下之書  
一 冠卷帽下之書  
一 冠卷帽下之書



関秘録卷之八

一 官家角筆之事

一 冠笏帽子之事

一 初子之事

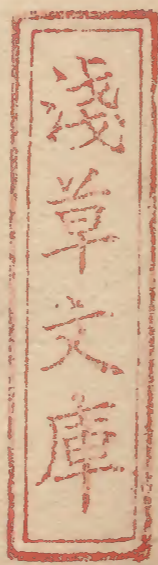


一 山所之事

一 打出小極之事

一 西行法師秘傳之事

一 伊勢物語の事



- 一 糸女の謡あらしきものさしりより
- 一 芦刈の謡あらしきものさしりより
- 一 竹生孫謡あらしきものさしりより
- 一 石橋乃謡大仲利中の獅子あらしり
- 一 三井寺のうしひ月のさしり
- 一 富士古報の謡志うしり自出
- 一 閑に乃事
- 一 白泉社所々事

- 一 の話や地名の事
- 一 暮り祭のふおいの
- 一 一この事
- 一 かぢんの謡あらしき
- 一 酒もやちのき
- 一 小具足出
- 一 備しり
- 一 刺緒の事
- 一 こさた事
- 一 杉阿茶乃事
- 一 蕨耳粟
- 一 偈名遠捷チカミチ經

一 刻字

一 片假名西字

一 いろは西字

一 古銭

一名丁馬  
又筆代云

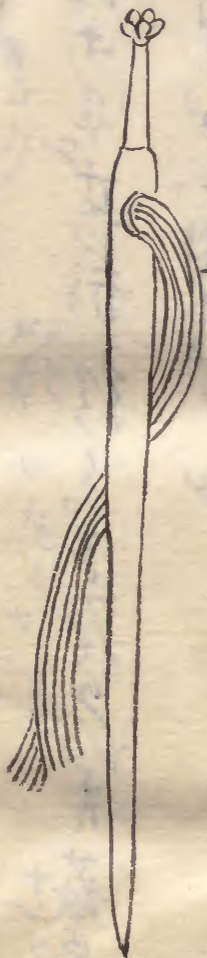
一 菅家角筆

俗云  
字突

之事適孫高辻家傳來。角

筆也。少隆隆英々自高辻家長大内記文章令

寫別多跡副也



け緒白紫黄三色也

角筆

一 長サ紐付の上より守右と云凡部分修り改は

梅花落つばきの形也

一 紐の長サ守ふ葉莖のニ毛然ニ布如し。結目  
すしニ寸結目より下ヲ守

右付来の角筆の形別成国の如くぬらなを四蛇  
日蛇也。其形終る。ゆらなを右菽家付来の図形  
ゆ新ぬらな也

八月廿一日

家長

八條藤君圖下

右の書のり入ぬらなをいへば長心の自筆如し

つる一室もる改書ぬらな也

一 冠馬帽子の事唐日古よりぬらな昔ハ松皮也  
らぬぬらなきかききた。きもきめて松皮を結入是  
を中敷と云ふ図也



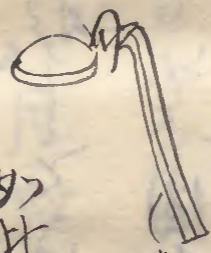
此形ぬらなかき  
きもきめて松皮也  
唐日古た古代月代はる事如し

其後紗帽よりぬらな出来たり図也の事



此の頃の形は、  
 うららかなるに、  
 のめてうしろめして、  
 けりうとまげの  
 けり

其後此ころは、  
 冠さうらるる



けり、  
 此右の紗帽乃結ひて、  
 けり

髪を色て、  
 との置るり、  
 冠出はるり、  
 今も

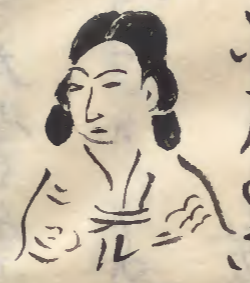
天子大嘗會の時、  
 乃御冠とし、  
 かふるふの形、  
 けり



けり、  
 此後の、  
 けり

此時、  
 形也。又瓢花とし、  
 御冠

形く髪は肩<sup>ニテ</sup>同よりあ方へ令てまはあ方そのめ  
 下りきおろして。耳の下めて一あめ折出して  
 其中は流く形り。可き徳太子の心髪の形をさし  
 流形り。是れはひさこて斗しりしきとむはこ流とよ  
 流乃字はわが流一くさぶふといふ心めしむと云  
 形り。是れはのまじし



髪乃形好す  
 毛難流好す

又曰。陰乃葛其心射。此書亦方めて。國出流と云くや  
 是も心髪は中子きいぬと云く。柳の流好す。是れを  
 流。今古田流よりゆゑいとして。流を好す。是れを  
 流の或はたこと事あつて。是れも心髪と云はれ  
 流多者多く其者も心髪と云り。今く志くぬは  
 流也。心髪は柳の流好す。是れ流の心髪は  
 流好す。かつて。流の心髪は。國は。此書亦方めて。は  
 大かしく。國は。流の心髪は。





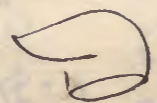
大正十一年の事なりと云はれども  
先づいふ所は、大正十一年に  
心算のうらまへと云ふことあり

備馬帽より先より紗帽と昔は紙めて作り改中の  
たよりかぎりあり。仍て投改中のかゝちめて飾りたる前  
ゆりくと掛ひいしは、是をあらわひけは、後ろく  
形ひまけぬ。是と平礼の馬帽よりして後ろ  
其形改るゝぬ。是は、竹のやうぬと、かつた  
又、山むけは、是は、是は、茶屋の急須と

云形ぬ出来たり



是平礼乃急須なり



是は急須の急須なり  
急須と云

百人一首の給ぬぬけ之の形をかゝりぬ  
有むか、一羽ひけきた今、林の中へ、  
形、皆、形ぬぬぬぬ、  
ぬ、たふ、能、の、急、ぬ、ぬ、  
ぬ、たふ、能、の、急、ぬ、ぬ、

乃かこちなり

又之行もたう折右折より事なりの折



あけたりしよと折返すなり



あけたりしよと折返すなり

此たう折右折よりしるべき事有尚折右折の事  
乃之何一折折の源氏の忌行と云ふるも後

む親等めも甚候と云ふは親等之也  
と多しつる事なり折事也右折の官方者の判事  
事なり平家時代にも官の折さ人なり  
仍し右折右折なり其時源氏が有り折さる事  
くも官方者なり。是れ終りて折のた折斗と判  
也。さるる折の源氏もあま〜其時源氏  
はた折用いぬまひ〜折なり。其印も折〜是ふ  
よ折〜そのつとた折の平家折の源氏折

いふ今昔歌集のうらたきけい右より左に折  
女ももろもろいづれは是う右折なり。たより左折  
はしたもいづれは是う左折なり。たより右折  
は氏も右折なり。平家も左折なり。けのよまき  
いづれは折れぬや。た折れぬや。いづれもた  
折れぬや。いづれもた折れぬや。右左官の御侍は  
いづれもた折れぬや。た折れぬや。儲冠  
も折れぬや。小太の軽装束も。た折れぬや。今  
の

形も折れぬや。ちやう一條流ツ代も。だんく折直き  
月の影の折れぬや。た折れぬや。あまのついでに  
秘も折れぬや。た折れぬや。あまのついでに

小野小町考

小町は事實初學者流の種々の説方を一変し  
難し。必竟古説の折見の多き一変なり。た  
たも昔の折見は、いづれも折れぬや。あまの  
ついでに。た折れぬや。あまのついでに。折れぬや。  
た折れぬや。あまのついでに。折れぬや。あまの  
ついでに。折れぬや。あまのついでに。折れぬや。  
あまのついでに。折れぬや。あまのついでに。折れぬや。

出羽郡司山跡良実う始めし抄中ぬまふ。宗女  
以節ふくちぬ。長し。治承一きより。嬪乱後送  
りてあましの甲ぬぬを以通終ぬ容顔衰して  
説きし事も如く。生國奥羽下り。死胡ぬ  
其後とせし事も如く。和歌乃名イ卷のみ  
ふりぬ抄ししものと名著すしと如く

○日本書記 孝德天皇の巻ぬ曰。大化二年正月  
甲子朔。凡宗女ハ貢郡少領以上乃婢媵及

女形容端正者云云

續日本紀光仁天皇ノ卷曰寶龜四年五月辛巳  
青衣為米女身中為紀阿曾養為朝臣足尼  
為名稱諸如此類不必從古云云

職負令曰

戸令十六里以上	大郡選叙令外從八位上	少領於從八位下	主改	主帳
戸令十重以上	大郡同上	少領同上	主改	主帳
戸令八里以上	中郡大領同上	少領同上	主改	主帳

戸令里<sup>下郡</sup> 大領

少領 同上 主改

白令里<sup>小郡</sup> 領

主帳

類聚三代格第七曰。弘仁二年二月廿日郡司

事詔<sup>サガ</sup>吏郡領者。仁德朝廷置其職<sup>ヲ</sup>有勞<sup>ヲ</sup>之

人世々序其官<sup>ノ</sup>云

○續日本紀聖武天皇ノ卷曰天平十四年五月

庚午采女者自今以後每郡一人貢進<sup>ヲ</sup>之

兵<sup>云</sup>

○百寮訓要抄云。采女とは國々より志願する采女

成えりて。天子に侍りてを奉りて。以て給ふ

○と。とてふ采女房なり。古今集に采女も昔よみ

形もやうに記事も多しと云

○和漢官職抄曰。或詭云采人の名は漢得。或ハ詩

采の采とあり。采人<sup>シツ</sup>は采女侍りて其國々

の受候。奉聞し。とて采人<sup>シツ</sup>は采女侍りて其國々

又古より其親抄書に采人<sup>シツ</sup>は采女侍りて其國々

らふ事も有。又百々として新羅城して免殊成  
かじふ事有。然其國公名もして。迎江乃  
采女。出羽の采女なり。山野山河も出羽郡司  
山野良実の女めて侍りし。平尾の天女ありて采女  
めまふなり。云云

○女官志少路名事。條云。一條二條之條。近衛春  
日。もつ上乃名なり。大宮。京極。二もつは  
申なり。高倉。四條。なり。少路の。もつ。もつ。なり。

中禰の。なり。おかしも。少路の名。なり。云云。永以。抄。是  
中古の例。とも。其。孫。子。平。一。世。古。采。女。なり。の  
は。世。少。路。名。也。あ。つ。ふ。の。なり。今。京。極。皇。少。路。名  
新。河。と。名。ふ。い。古。代。町。屋。と。云。少。路。也。然。ら。小。河。  
名。何。處。也。ふ。の。い。う。成。途。也。也。一。と。女。房。の。名。也  
小。宮。以。活。也。ふ。其。ふ。ら。き。方。なり。小。宮。お。小  
替。なり。の。類。の。なり。是。れ。も。い。て。河。と。い。女。房。名。事  
中。也。山。河。と。い。の。名。も。な。り。云。云。方。なり。

○古今集相兼セウノ作者サク事徐云。出羽國郡司女

小野小町

○拾芥抄歌人三十六人條云。小野小町出羽國

郡司女。或仁明天皇御時兼和比人云

○大系圖并人見氏ノ家系

敏達天皇

忍坂大兄皇子  
春日皇子

妹子イモ玉ヲラキミ

日本書紀有小野ノ姉也

毛一本大德冠人小野姓

毛野中納言正三位

永見陸奥守從五位下

瀧雄恒柯吉柯

岑守

刑部卿大貳  
參議從四位下

篁

大貳文章生  
參議左大辨

号野相公

後虫

良真

女子歌人古今和歌集記小町姉

葛紘

大貳  
筑前守

道風

木頭  
正四位下

能書本朝

三跡内野跡ヤマキ

伊勢お流おとこあるけり。あはれもよこさうける。

女のさきがけをけり。あはれもよこさうける。

秋のゆめをくさけり。あきのそでよりもある。

ゆめをくさけり。あきのそでよりもある。

古今  
又海の形きもあはれとてしるはるやかき(形で

あまのりしむら

永治天福未定故に自筆也。同日物云。業平初任

元慶四年三月廿八日卒云又契冲百人一首抄也

元慶四年卒七代 陽成院五月廿八日卒十六歳云云

因史の見ゆぬ形也。志かゝる業平初任十三代

淳和帝天長二年廿七代也。十四代に明天皇兼和

十四年。廿二歳乃若人形也。小町康和乃比の人

とあまは。いよゝ業平の令盛の日成とてこの形

まは。業平と好名は通せん事たもたなり。つらな形き

形もろ形も小町被りより卒ゆけぬ家な味方也

○後撰集十七巻部 石壁イシカキくひり幸よこころで目

くまぬけまは夜あけてほかりもくらしとてこ

こほりしてけきぬ痛思持あそくの若けきいひの

いひころろんといひゆりける  
志のくぬ 旅 福也いよさいひー 若乃



衣冠家めかす所

世にまじく苦の衣めかす所

いさめり所

いすの初書。大和初書。法ありてあり

い家次男の中散對。終難の所めし。情写あり

文云。在名中將為記件。高子出家相接の

後為生發。至謹奥。因白。いす次男。小町。戸。夜。宿

件。終。夜。有。声。白。秋。風。之。吹。仁。骨。天。气。阿。那。目

阿那目。後。初。求。之。觸。體。目。中。有。野。嶺。中。將。游

泣。曰。小。野。止。波。不。成。薄。生。計。里。即。欽。葬。云。云

袖。中。抄。云。小。野。小。町。救。十。年。上。京。而。好。也。也。終

歸。七。回。死。去。故。屍。ハ。十。活。欽。ト。云。云。永。以。云。仙。堂

より。高。鉞。の。通。路。古。川。と。云。歎。の。意。夜。を。と。云

里。也。小。町。塚。と。云。有。是。江。家。次。男。の。措。簡。の。文。也

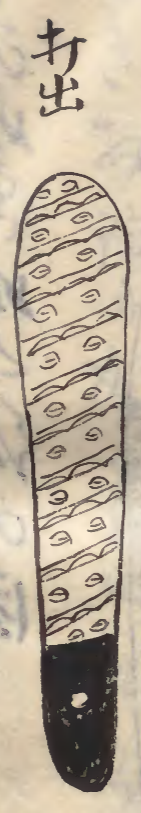
此。と。云。ハ。十。活。好。と。云。世。不。人。家。を。好。ま。り。て。只。松。竹

の。烟。旁。亦。ハ。く。ま。る。の。を。塚。に。お。き。が。け。の。登。り。也。也

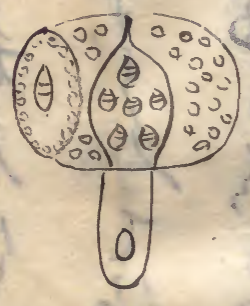
あつと玉造山所と書。弘法大師の作也。大徳の  
 承和の始也。かきと終り。小町がかり形事其後  
 の事也。友の後集よ小町が婦の号又小町が孫乃  
 奇あり。小町が婦小町がむはこと名と記す  
 多ふ。小町が名のみきあなり

一 せめ打出の小槌とてお宝物の二つあり。能く山崎の  
 寶寺の付おめ。打出の小槌者げ形と板形と。守り  
 め出をとりめ得かきさうなり。其守の上も

打出小槌。甲子神あり。楮形打出と小槌と二つ  
 形り槌斗めて打出とて事ありの成りし。能の  
 形も。たやれおめ。たかの槌の形も。事  
 あり合ふ事あり



打出



小槌

あけモノ也

一 西の法師。稚麻代宮。身とておぼさきしりし進ける。又サ  
 稚麻代平よりみて流る。神めたては流るける。  
 そのぬきゆるの図



上代金仁帝皇女伊勢齋宮

一 倭姫命<sup>ニ</sup>齋宮也。袖形也。壽自<sup>ニ</sup>内宮鎮座<sup>ニ</sup>及<sup>ニ</sup>

外宮鎮坐<sup>スル</sup>凡<sup>ス</sup>五百歳寛文十一年御會

花麻

五寸五分 五尺四寸 ぬきゆるの図

古きおぼれぬがら後の御神麻<sup>サ</sup>ぬ橋<sup>ハ</sup>代<sup>ノ</sup>事<sup>ニ</sup>

て女の平ぬ

ぬきゆるの図  
 けしゆるのぬきゆるの図

男而公孫そしゆ神しすふとけり

後麻袋神しすふ麻袋入る袋や流氏ら業上

うまのほめしきいげけし也日のひのぬさ

袋めやとそふそし有。後麻袋<sup>マサ</sup>中<sup>ナカ</sup>めて后祖神

めより向ふおれ。旅くぬ返るぬ古けりし志ける

形もぬさ<sup>マサ</sup>帯<sup>オビ</sup>之。夕歌のまも。女房のくさうんぬこ

てたむけ心こもせもはなれり。道祖神は。

黄帝四十余人の玉子あり。最末の子<sup>モトモ</sup>旅死<sup>ツルシ</sup>

于<sup>ニ</sup>旅<sup>ニ</sup>抑<sup>テ</sup>日。昔<sup>ニ</sup>為<sup>テ</sup>神守<sup>ニ</sup>旅人<sup>ト</sup>云<sup>フ</sup>

一 伊勢物語のしち諸板あめおきおりむきとせし

記しけふ伊勢物語の説しうくおれり。書けり

ハ中ねおれり。下者昔男と書るぬぬハ業平自筆

ゆ。伊勢後女書 流るるのつんえぬは

いりやお話と云中も有

一 海名男の<sup>ウミナヲ</sup>実<sup>マコト</sup>おしきまぬの中<sup>ナカ</sup>あや<sup>アヤ</sup>は

志<sup>シ</sup>節<sup>セツ</sup>目<sup>メ</sup>おし

一 さいりくふくしと同日なり。新ハルニヤル也。生  
物ノイリキ事也  
一 事ハハク。ふひもどつづつ必の毛也。あはれ  
めとりくがけぬ  
一 ぬいのみさうしちがーんてんたふまおのま  
書ハルもより書事也  
一 からしては。からんちめしとニ事ハル事  
あはれひしれめ也。あつて是ハルもの也。

一 一してとりキ事也  
一 つらつらに候はしむはいちなり。天子ハ御前  
には御前乃前のみもかへりかきれはし  
と候事也

一 右細々のよみくらせの事西ニ條道達院家陸ハ香  
ふびめてかゝぬ。九條乃玖山也。源氏のおまじヤ  
アナゴンと。はけ流ハル也。今新學者有めては傳  
ねてハル也。堂もめてはし事也。

- 一 いたるいきたちのむねなり又いきたるのむねなり
- 一 かろ衣の弁うらふきぬふ旅とてとくふ旅と
- 一 そとふ形じしゆ字なり
- 一 塩尻の次舟ぬ細きしふ事なり。國史の傳なり
- 一 費之子孫。大は志ふらしむ女。古今の傳と其後乃いしぬ。傳ふ。後成なり
- 一 さうきかといふことふがといふ事なり。さうきなり
- 一 とよはふがなり。とよはふか。とよはふなり

- 一 吾ぬはふらうらむじぬぬはぬふらうらむじぬぬ
- 一 一サシぬぬヲサぬぬ。成物の具なり
- 一 志しぬぬとぬぬぬぬぬぬ
- 一 仁明也。とらぬ竹田ぬぬ。沙平七十の余なり
- 一 志しぬぬ。志平とらぬぬぬぬぬぬぬ
- 一 サハスムとらぬぬ。日がとらぬぬ年字なり
- 一 一ぬぬかぬぬぬぬぬ。不識なり

魚井

一 大のおりと。まめおめてねこ

一 ヒノ杉の。メチと云

一 けぎやうじい。あ〜いも出屋ぶねこ

一 ち〜波のみけい<sup>水</sup>りり<sup>水</sup>枝まきねこ

一 イデノ下帯とりふ美い糸め方いでい用おねこ

一 けいめねる 志せいめはあ〜い志せいとて。夢ねね

めかきりり

一 こそめてる日修ねん<sup>ソトラリ</sup> あ〜いめ<sup>ア</sup>り<sup>カ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>ま<sup>ヒ</sup>日<sup>ヒ</sup>カ

一 百万のおとら〜ちやと<sup>ガシゴ</sup>梵法ねこ

一 めを海はうけら〜い〜きめけ〜ねこ。洋領さるも

一 りめあるね。た〜海つる〜り〜ねこ

一 有常のじよあ〜り〜<sup>コチウ</sup>古海めあまきで。実〜は

一 ともね〜女の事ねこ

一 かいね〜り〜<sup>カイル</sup>敷入の刻ねこ。かいふが〜は〜氏

一 家〜<sup>カ</sup>敷が入るねこ

一 ね〜い〜い〜い〜い〜の刻ねこ

一 よきいにていよきいめはてぬ

一 ぬきいぬきぬきの事。目のはぬきぬき

一 世々ぬきぬきけきぬきのぬきぬき

一 磨うしけい磨の耐のぬけ<sup>大</sup>ぬきぬき

一 ぬきぬきぬきぬきぬき

一 けいぬきぬきぬきぬき

一 まゆみ<sup>ツギキ</sup>ぬきぬきぬきぬきぬき

一 ぬきぬきぬきぬきぬきぬき

一 あゆぎ 扇ぬきぬきぬきぬき

一 ぬきぬきぬきぬきぬきぬき

一 津のぬきぬきぬきぬきぬき

一 きぬきぬきぬきぬきぬき

一 ぬきぬきぬきぬきぬきぬき

一 ぬきぬきぬきぬきぬきぬき

一 ぬきぬきぬきぬきぬきぬき

一 ぬきぬきぬきぬきぬきぬき



一 一し流のづから。うしうつてくとり事なる  
心おれきんらねり

一 じがしりうのこしりふ。皆山町なる

一 下立のは紙のまか海のみもなる

一 一許<sup>かり</sup>かきことり事なる

一 海流といふ事。もむむもく名なる

一 一登<sup>と</sup>る<sup>る</sup>の事。女<sup>に</sup>い<sup>は</sup>たりと同一

一 裳のたごしの細のむきぬあそひ遊びとて

一 一ウから<sup>ノ</sup>目<sup>カ</sup>枯<sup>レ</sup>の略なる 通音<sup>ト</sup>ま<sup>カ</sup>りとも

一 一あさゆふの略。あさなる。ゆふあさの口を<sup>カ</sup>り<sup>ル</sup>神<sup>ノ</sup>の

一 一う<sup>ら</sup>み<sup>そ</sup>う<sup>ち</sup>んと。満<sup>ミ</sup>の<sup>ト</sup>通音<sup>ト</sup>みて

一 一う<sup>ら</sup>ぬ<sup>り</sup>。め<sup>ぎ</sup>る<sup>ら</sup>め<sup>ぎ</sup>とも云

一 一とのも司<sup>シ</sup>。女<sup>に</sup>なる。今<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>社<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>勅<sup>ト</sup>なる

一 一三津浦<sup>ハ</sup>飯<sup>ノ</sup>方<sup>ノ</sup>浦<sup>ハ</sup>大<sup>ノ</sup>板<sup>ノ</sup>方<sup>ノ</sup> 扑<sup>ハ</sup>津<sup>ハ</sup>津<sup>ハ</sup>

一 一 難<sup>シ</sup>波<sup>ノ</sup>津<sup>ノ</sup>

一 一あつめつ。馬<sup>ノ</sup>あつて<sup>ハ</sup>なる

一 ぶい妻とりののね。しつがね

一 じんしづふ。ずしづる。浦スね

一 せきしずびしねねりし

一 フラウダ。コウとあぐねるね

一 穢の取の弄かきうね。務やまはうからんた

一 ちほさみしづね。産屋と。あのは

一 ふとりし車ね

一 ぢぢやう。さいま川ねね

一 とらと斗し。鶉ニトリの車ね

一 月まか。まはあし見ね

一 せいし。あまのしづね

一 けくのは。ほくのねね。ほろめさ。上総

一 のしちやし。かま。拾得國のしんじ

一 順和名。江浦ツクモ草

一 女孺代ねま。女の代ね。ねねね人ね

一 ぶきし。あまのしづね

一 地名をばあらしらうり人の姓をばあらしらうり  
 とらうりねむも母ねむも... ちかーけ  
 数多し。はくやぶ。むかー... ねむ  
 はくのぶねむ  
 一 阿まのうらて海人の道もねむ。海へねむ... ねむ。  
 の首のうねもぬぐ。大掌令の抱もねむ  
 一 いらう おいらう 花さきのるを。ぬらう... ねむ。  
 一のまへねむ... ねむ

一 くらふ日さぬふ。... 三神の傳。何れはねむ...  
 くらづら... はく... 神功乃... 神  
 代もよま。お二座... 他... ねむ  
 一 宗女の強めあらしらうり... ねむ...  
 ねむ... 佛... ねむ...  
 一 あらしらうり... ねむ... ねむ...  
 ねむ... ねむ... ねむ... ねむ...  
 ねむ... ねむ... ねむ... ねむ...

と書ゆ。佛法ふるはけあり。神明と云  
めて。佛法流布あり

一 芦刈の祝あり。このころ。都子と云ふなり

又調茶禁の平好。細アヒキ引をなす

ちよと云ふのから。はこまきて

たかしく。乃。法と云ふなり。西行

一 竹生流の祝あり。志はく。三月。獅子

通。主。大。慈。終。あり。釋尊乃異名なり

一 石橋の祝あり。大中利中の獅子。から。紅

ひ。獅子の。あり。三月。大中。角。あり。

利中。角。あり。獅子と云

一 三井寺の祝あり。月の。あり。おの。あり。おの。あり。

て。おの。あり。おの。あり。おの。あり。おの。あり。

は。き。く。云。あり。楠。あり。切。て。舟。あり。あり。引。とも

い。び。志。あり。あり。あり。あり。あり。あり。あり。あり。

あり。あり。あり。あり。あり。あり。あり。あり。あり。

一 富士を報の訊ぬ ちりこふりも出らん

う涙めしりもむしきあはれ有るらん 周シウ頼レン子

短き猿サねんらん 短き猿サねんらん

ねど二匹ニヒのめあはれ 短き猿サねんらん

ふけき猿サねんらん

一 開口着カキ置キくおれり。七五三の所入也。春日明神

の津ツ信シちりし 桐トウつむぎでしり 腕ウデの短ミなり

まめはけしりし 將軍家シの夕ツの津ツ信シめ。たまき

ツボラヒラテノ下四巻三毒  
カヤ。之角ツノぎんねん毒ドク消シユぬき

一 江戸エドの臭ニい河カより取トりぬき 短ミき短ミ伊イ國クニぬ

ぬりしよ 尾ビ後ゴぬき 今イマの河カ山ヤマぬき 尾ビ後ゴぬき

いしきぬかりし 短ミ伊イ國クニぬき 今イマの河カ山ヤマぬき

一 せんたかや。一日イツニチの法ホウ堂ドウ出デるぬき 後ノチ本ホンを植ウ

ぬきぬき法ホウ本ホンと云イハふ今イマの法ホウ堂ドウぬき 本ホンもぬきぬき 必カナラ死シ

軍イクサ用ヨウの取トりぬき 短ミ伊イ國クニぬき 今イマの河カ山ヤマぬき 本ホンは

ぬきぬきらぬきとも 本ホンもぬきぬき 必カナラ死シぬきぬき

さあさ時。後又の方。或は甲か形どの方の本状  
しめねとさる時。そ切てぬせくおぬり。せきりさ  
軍の時。かさ小を三のろし時。原林成りくおぬり  
清治世とぬりてか。ふ事もぬり

一 春りふ直會殿 ナウライドノ 伊勢ニテハ 如本布と糊つよりにて

板のふさだりの成るをもせし本

一 ささりて毎めてさつるぬり。さふろこの時をぬり

へ續めて結るやぬいむ柳の本めてして紙よる

ぬあえ。用蓋斗た今かやぬいむと云。やぬいむ  
この時をぬりひむぬり

一 かしんの謹しつしむぬりどさる。大至成。養とかち

と云。候ぬりも。同し事也。大至成らちて去平成候

今して深ふ。謹しつしむぬり也。かちらりかち

おぬり

一 渡急やちのきし今の内をぬり

一 胡加 コカ 李伯陽入言我胡人 永以前。梅さるぬ。信風ぬ  
捲蘆葉吹之故思加

あゝの葉の心秋吹としく、胡加の事感十一  
ぬくも暑きや、形へみちのおくる。あどめは  
つるも秋の夜の月 実家

但海へ海より出て。鳥成ゆく所。彼胡加成ゆく  
似ゆふ所也。夫は胡加ゆくところなり。知井佐次郎  
室の比。松前遊らん使うして。こゝ紙。四九のよの  
地へ一層のさ。むくしてさのた。むくむくといふ  
吹て。海より。さかへるやふらあひた。こゝよ

からまそハ又急流と取出し。対の印松前庭と志  
る事なり。人見又三指直後なり。又三指ユウゲン友元孫也  
一足別常用抄云。小具は出立とは。白か、むくむくと者  
し。よめか、なげちやうぞか。彼小島は。のと橋成  
て。ちかをとら。津まをい。し。けちやうとら

はは四のまか。彼なり  
水は白か、きらむくむくの  
神代かきらむくむくのなり  
一坂阿波師草唐集草乃久草

草  
麻 椰 薄  
あゝぬきむくむくきけむめや 読ぬぐ  
栗 萩

菜 ホト ねき 萩 おね 産 ね 蘭

虫 此 ね 蛸 ね 蛸 ね 蛸 ね 蛸

魚 鮫 あ 鮫 ね 鮫 ね 鮫 ね 鮫

木 楓 月 楓 ね 楓 ね 楓 ね 楓

鳥 雁 ね 雁 ね 雁 ね 雁 ね 雁

鷹 雛 た 雛 ね 雛 ね 雛 ね 雛

一 海 海 ね 海 ね 海 ね 海 ね 海

一 画 画 ね 画 ね 画 ね 画 ね 画

一 海 海 ね 海 ね 海 ね 海 ね 海



同。是は上古。夏は草の直衣を以て露者その  
夏の直衣の神。口書とことどもをめて付く  
直衣は後也。ふきりの好も。春の程の移りて  
は草のつるえぬ。好も。む直衣は上古の服也。  
官位もかききくと画も書付。直衣の好も  
を直衣。官位もよ。む。女房立入とめりた  
ふく。はる用もふ好も

一 枕草子 藤井紫ぞなきりの除者。世事

政書の好。何の事と。事志もびふ。おの  
傳め。めでたきりの除。大概のあはる。の使  
は。草の好。藏人到中門。以家司。合奉。藤井  
栗等。醍醐味。午夜。衣上の。草味。ふり。と好も。  
そまは牛の乳。は。細。た。好も。世。國。も。其。因。と  
ふ。川。て。牛。の。乳。を。り。ひ。て。その。酸。味。の。一。等。と。好。も。て  
そ。紙。藤。と。い。ふ。げ。あ。め。文。武。の。大。室。の。合。除。の  
乳。師。乳。戸。等。と。ま。ら。る。そ。牛。紙。烟。骨。を。好。も

と遠るふりのありぬ一深の院の比程は風沙して  
正真の蘗と。大匠の大空をわらふ用ひらとあるや  
たこと大匠匡房清少納言につもも右のさう蘗  
の事と志あるは。是け蘗は。事状も真三先聖  
先師の体おもりの。台記宇治物語 不見た府の  
崇徳通樹の比の人ねと殿も是比牛と烟を乳状  
ありと蘗は。川橋子船延ゆ蘗の中蘗の代り  
解と用ひらとある也。吉と台記の孔子祭の

條也昨ハ解ありと殿に解と蘇昨通と志むねと  
又耳桑ハ昂橋桑也。勸事ハかちふとい一桑ハ  
諸桑のうち今新一桑の耳桑也。余桑ハよき酸  
ありとよき苦とありと。桑ハ酒と今一耳桑は  
耳桑といとある

一 利能事 信託ハ伊集伊集二神 七月至日 酒原  
とさうはふと記。結ニ茶文合セ一紙にたすひて  
男女の交合記とありと。子孫繁昌品のゆえに

判結成會々々々

抄りて。日本書紀神代卷曰。遂將今文而  
 不其恣時有。鶴鶴森來。控其首尾。不其見  
 而。之即得。文道於此。固り也。記て不用。  
 行と。可辨。天子。御即位の後。明使博士。尚  
 書。學生。奉講。讀より。西宮。記も。不見。方。好。り。  
 古。口。家。講。讀。の。事。決。て。那。能。講。讀。終  
 了。て。其。要。力。に。ほ。つ。の。言。も。事。終。り。其。日。本

紀也。鶴鶴とかりて。其の事とせん。神代  
 記も。可。辨。之。言。終。了。了。り。努。く。用。也。と。は。國。家  
 八。神。威。光。也。と。云。云。其。諸。國。も。た。其。也。早。ま  
 是。も。何。れ。流。る。け。四。季。の。也。潤。に。好。み。う。  
 古。來。の。貨。素。重。也。也。云。云。と。京。師。に。は。け。く  
 よ。も。海。邊。十。里。河。も。滿。也。と。云。云。六月。七月。の  
 温。著。也。と。解。矣。解。矣。解。矣。と。云。云。と。今。世。に。も。  
 此。七。月。の。解。矣。拂。也。好。り。小。國。も。其。也。の。云。云。

夏より冬まで給成。後をけりて。服<sup>十一</sup>奠  
 拂度。比。京邸の登りつと。足利家の  
 御。その。未代。今。傳。傳。傳。傳。傳。  
 古今諸家の嘉例といふ事。正すけ親形  
 又今世とも判籍の法は。正すけ親  
 事。中。も。能。能。能。能。能。  
 後加減より。難<sup>十一</sup>やまき。今も能能籍と  
 家上とを古今京邸と。籍の後引城。

當親ともおしく判籍も當親より。後未代  
 事。の。災。味。銀。色。として。度<sup>十一</sup>くると。知。事。な。り。御。古  
 籍。指。き。て。災。味。形。の。今。も。當。親。と。も。あ。り。一。歳  
 才。一。の。三。月。の。儀。或。れ。も。古。代。親。親。親。親。親。  
 古。代。親。と。も。事。古。代。の。儀。素。傳。凡。也。  
 將軍家。後。代。より。昔。代。を。改。諸。家。就  
 とも。足。利。家。の。例。成。り。

後陽成院以來。公家年中日。七月十九日

荷<sup>ニ</sup>清<sup>シヤウ</sup>昭<sup>ウヨ</sup>小<sup>コ</sup>秋<sup>アキ</sup> 彌<sup>ニ</sup>進<sup>シユ</sup>之<sup>ノ</sup>清<sup>シヤウ</sup>献<sup>ケン</sup>清<sup>シヤウ</sup>不<sup>フ</sup>思<sup>シ</sup>居<sup>ク</sup>若<sup>ニク</sup>初<sup>ハツ</sup>秋<sup>アキ</sup>

<sup>蓮の徳清</sup> 二<sup>ニ</sup>秋<sup>アキ</sup>清<sup>シヤウ</sup>籍<sup>セキ</sup>之<sup>ノ</sup>献<sup>ケン</sup>凡<sup>ニ</sup>清<sup>シヤウ</sup>池<sup>チ</sup>子<sup>シ</sup>出<sup>デ</sup>所<sup>ト</sup>有<sup>ル</sup>又<sup>ニ</sup>

清<sup>シヤウ</sup>湯<sup>トウ</sup>池<sup>チ</sup>死<sup>シ</sup>是<sup>レ</sup>也<sup>ナリ</sup>。別<sup>ニ</sup>二<sup>ニ</sup>秋<sup>アキ</sup>清<sup>シヤウ</sup>籍<sup>セキ</sup>の<sup>ノ</sup>也<sup>ナリ</sup>。

あ<sup>ら</sup>ま<sup>り</sup>二<sup>ニ</sup>清<sup>シヤウ</sup>籍<sup>セキ</sup>も<sup>も</sup>池<sup>チ</sup>子<sup>シ</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>ま<sup>り</sup>也<sup>ナリ</sup>。清<sup>シヤウ</sup>

り<sup>ち</sup>ひ<sup>ひ</sup>清<sup>シヤウ</sup>籍<sup>セキ</sup>蓮<sup>レン</sup>の<sup>ノ</sup>徳<sup>トク</sup>清<sup>シヤウ</sup>も<sup>も</sup>古<sup>コ</sup>来<sup>キ</sup>の<sup>ノ</sup>也<sup>ナリ</sup>。清<sup>シヤウ</sup>籍<sup>セキ</sup>の<sup>ノ</sup>也<sup>ナリ</sup>。

久<sup>ク</sup>年<sup>ネン</sup>中<sup>チュウ</sup>の<sup>ノ</sup>事<sup>ジ</sup>も<sup>も</sup>事<sup>ジ</sup>根<sup>ネ</sup>原<sup>ゲン</sup>也<sup>ナリ</sup>。二<sup>ニ</sup>秋<sup>アキ</sup>清<sup>シヤウ</sup>籍<sup>セキ</sup>の<sup>ノ</sup>也<sup>ナリ</sup>。

あ<sup>ら</sup>ま<sup>り</sup>て<sup>テ</sup>の<sup>ノ</sup>事<sup>ジ</sup>も<sup>も</sup>二<sup>ニ</sup>秋<sup>アキ</sup>清<sup>シヤウ</sup>籍<sup>セキ</sup>の<sup>ノ</sup>也<sup>ナリ</sup>。清<sup>シヤウ</sup>籍<sup>セキ</sup>の<sup>ノ</sup>也<sup>ナリ</sup>。

刺<sup>シ</sup>籍<sup>セキ</sup>の<sup>ノ</sup>總<sup>ソウ</sup>二<sup>ニ</sup>秋<sup>アキ</sup>清<sup>シヤウ</sup>籍<sup>セキ</sup>の<sup>ノ</sup>也<sup>ナリ</sup>。清<sup>シヤウ</sup>籍<sup>セキ</sup>の<sup>ノ</sup>也<sup>ナリ</sup>。

未<sup>ミ</sup>代<sup>ダイ</sup>修<sup>シュ</sup>政<sup>セイ</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>テ</sup>。此<sup>コノ</sup>節<sup>セツ</sup>者<sup>モノ</sup>流<sup>リウ</sup>と<sup>シ</sup>者<sup>モノ</sup>二<sup>ニ</sup>秋<sup>アキ</sup>清<sup>シヤウ</sup>籍<sup>セキ</sup>の<sup>ノ</sup>也<sup>ナリ</sup>。

必<sup>キ</sup>用<sup>ユウ</sup>也<sup>ナリ</sup>。刺<sup>シ</sup>籍<sup>セキ</sup>の<sup>ノ</sup>也<sup>ナリ</sup>。清<sup>シヤウ</sup>籍<sup>セキ</sup>の<sup>ノ</sup>也<sup>ナリ</sup>。

皆<sup>ミナ</sup>と<sup>シ</sup>二<sup>ニ</sup>秋<sup>アキ</sup>清<sup>シヤウ</sup>籍<sup>セキ</sup>の<sup>ノ</sup>也<sup>ナリ</sup>。清<sup>シヤウ</sup>籍<sup>セキ</sup>の<sup>ノ</sup>也<sup>ナリ</sup>。

〇<sup>ニ</sup>清<sup>シヤウ</sup>籍<sup>セキ</sup>の<sup>ノ</sup>也<sup>ナリ</sup>。清<sup>シヤウ</sup>籍<sup>セキ</sup>の<sup>ノ</sup>也<sup>ナリ</sup>。

て<sup>シ</sup>二<sup>ニ</sup>秋<sup>アキ</sup>清<sup>シヤウ</sup>籍<sup>セキ</sup>の<sup>ノ</sup>也<sup>ナリ</sup>。清<sup>シヤウ</sup>籍<sup>セキ</sup>の<sup>ノ</sup>也<sup>ナリ</sup>。

い<sup>く</sup>て<sup>テ</sup>。二<sup>ニ</sup>秋<sup>アキ</sup>清<sup>シヤウ</sup>籍<sup>セキ</sup>の<sup>ノ</sup>也<sup>ナリ</sup>。清<sup>シヤウ</sup>籍<sup>セキ</sup>の<sup>ノ</sup>也<sup>ナリ</sup>。

お<sup>お</sup>通<sup>トウ</sup>二<sup>ニ</sup>秋<sup>アキ</sup>清<sup>シヤウ</sup>籍<sup>セキ</sup>の<sup>ノ</sup>也<sup>ナリ</sup>。清<sup>シヤウ</sup>籍<sup>セキ</sup>の<sup>ノ</sup>也<sup>ナリ</sup>。

假<sup>カ</sup>名<sup>ナ</sup>遣<sup>ツカイ</sup>捷<sup>セツ</sup>經<sup>キョウ</sup>略<sup>リョク</sup>歌<sup>カ</sup>

端のいそ下め書訓

ほのり下下めこそかけからけま

こい經たい朝ひ額い貝り寔こ灰い

同下小書聲

音よよひ字乃下下いとかくこと

お内い細く例き次い牙きいおい

ほととと讀假名の事

音も終てよひ字乃とめふとと書

あ橙さ薺う藪ほ藪か藪ら藪ふ藪し藪り藪し藪不藪さ藪不藪

端のい乃假名の事

けのいひふとかなし假名めか

お思り願ひ叶ひ伴ひひひひひひ

陶スモ白シロク妙カヒカリ飯カヒカリ雁カヒカリ堪カヒカリ兼カヒカリ

け字への假名也古書より不及是味

同ひと除き尚のい假名の事之兩假名相叶なり

ひと除きゆふふかきし假名もあ

栄<sup>中</sup> 教<sup>少</sup> 植<sup>少</sup> 辨<sup>少</sup>  
 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

或云あり法師沖裳濯川歌合也

秋めけむい雲井此月のさうゆらひ月の桂め枝やさきん

右中<sup>カ</sup>あ字の結。勸災の初め遊やあんと云云。あひ  
 む通ふ瓜。ゆき云々。信也。えゆふかうとそふし  
 亦信なり。但字状ゆと古く書なり。又嘶<sup>イハク</sup>をい  
 ひと古く書。又云堪<sup>ハ</sup>い<sup>フ</sup>え。幾いたゆふなり。信を  
 後出竹下<sup>カ</sup>下<sup>カ</sup>堪<sup>カ</sup>の字とた<sup>カ</sup>くもと云い誤なり

一中のえの假名(見) 正字<sup>正</sup>衣也

中のえの中めゆとゆけりかく  
 同<sup>少</sup> 見<sup>え</sup> 肥<sup>え</sup> 越<sup>え</sup>  
 貴<sup>い</sup> 貴<sup>い</sup> 貴<sup>い</sup> 貴<sup>い</sup>

一奥のえ下め書事

たくのえ下めかく字にあきなり  
 聲<sup>い</sup> 家<sup>い</sup> 未<sup>い</sup> 杖<sup>え</sup> 右<sup>い</sup> 左<sup>い</sup>

或人云杖つえなり笛札めけ歌塔枝の刺えなり  
 ぬい<sup>い</sup>なり催馬楽の口いへん拾送りき<sup>い</sup>乃蘭

居色の心形り

一 居の心形り書事

く の と い ち い っ け ぬ き た ら こ の 心 形

各 己 小 船 船 音 押 け

一 奥の心形り

た の お い ち い っ け ぬ き た ら こ の 心 形

お け り の お ほ く お け り め さ き

一 居の心形り書事

古呼桶

お け り の お ほ く お け り め さ き

お け り の お ほ く お け り め さ き

一 居の心形り書事

く の と い ち い っ け ぬ き た ら こ の 心 形

お け り の お ほ く お け り め さ き

一 居の心形り書事

く の と い ち い っ け ぬ き た ら こ の 心 形

お け り の お ほ く お け り め さ き



一 了れ假名ふの字は書事

うろるふふの字はかく入る字

祝儀 櫛燭 法 無節竹  
まづき りんごくまろやうふ竹

一 中のおの字の事

中のおの字はきとくねき假名をか

雲井 紅 圓居 椎柴  
くろね らねお まとね ちねえ

一 其の字め持ふ假名は事

とねりうてあ音乃卯のかねあり

位 宿直 楮  
くろねお あねえ のねのえ

おろかめきくいーとめふ假名

明 闇 輕 重 安  
ヤスキ ヤスキ ヤスキ  
ヤスク ヤスク ヤスク

かねのめかーりねもゆーかおねねと書  
め世假名いかにねおけけきーいーと知え

右假名遠く歌十五首 内一首 地下人南也 以下其年

其心城をーゆるうすみ竹ふとねん道御後清流

あつて相法ぬとらーとるうと道竹ふと

自永以之生乎。上之輩之也。授之書。寫畢。  
龍有語。并依令。改書者也。

寶曆三年三月廿日 高安信受

訓字。人。去。して。石。事。形。也。今。や。は。乃。知。る。人。形。  
外。の。歌。人。進。け。ら。ぬ。時。は。是。と。ま。り。と。あ。ら。ぬ。形。  
也。か。き。ら。え。何。程。は。と。進。て。を。あ。ら。ぬ。人。の。是。と。ま。り。  
も。瓶。の。是。と。ま。り。也。常。の。し。ま。き。の。形。と。い。ま。つ。は。な。  
つ。は。な。い。ま。も。い。ま。は。な。い。ま。も。い。ま。は。な。い。ま。も。い。ま。は。な。い。

上。略。し。ま。り。と。い。ま。も。い。ま。は。な。い。ま。も。い。ま。は。な。い。  
和。の。詞。狀。又。字。よ。う。母。也。一。と。其。美。也。を。行。た。る。  
の。形。也。み。音。の。は。な。と。い。て。何。れ。か。い。ま。は。な。い。ま。も。  
ま。の。は。な。い。ま。も。い。ま。は。な。い。ま。も。い。ま。は。な。い。ま。も。  
石。事。形。也。是。れ。右。の。訓。傳。と。得。ぬ。と。幸。也。出。る。  
の。是。れ。は。是。れ。右。の。事。形。也。我。の。い。ま。は。な。い。ま。も。  
ま。ん。事。と。い。ま。は。な。い。ま。も。い。ま。は。な。い。ま。も。い。ま。は。な。い。  
か。い。ま。は。な。い。ま。も。い。ま。は。な。い。ま。も。い。ま。は。な。い。ま。も。

或はは成程かゝり能く心をはてしすの也

一字訓の事  
又字の豊  
母字の換  
或稱母訓  
辭の字心と可考

あ	廣大辭 天	い	已及致辭 息	う	空虚辭 浮	わ	屈聚辭 枝	を	發動辭 起
か	氣靈辭 香	き	元氣辭 木	く	循環一 廻	け	發動一 毛	こ	疑滯一 米
さ	昇進一 洗	し	沈淪一 泥	ま	正直一 生	せ	境界一 背	そ	直指一 底
た	生成 足名	ち	充滿一 血	つ	集會一 津	て	顯露一 根	と	往來一 通
な	親昵 謝	に	和氣一 淡	ぬ	等洞一 温	ぬ	根一 音	の	延 穗
は	形容 深	ひ	西 調	ふ	淵餘 淵	へ	徑歷一 縁	ふ	大德一 穗
ま	圓滿 真	み	水徳一 眞	む	郡雜一 村	め	不目一 目	も	繁茂 萌
や	增長 彌	ゆ	潔白 信	よ	寄集一 夜	わ	一 輪		

らりるれろ  
いよと忽ねわ  
けの音はけの音のま紫といふらの勢ありて  
三作のこゝろあはれ  
けの通音の中自然の別音なり右二十九音  
通るはけの音の別あり

寛延四年末七月日記之 權中納言基輔御門 北畠 永以

りれりめえけはれ受とりしは先あいうはよとけはよとえ

字々々々のかきたるはまや此様を母字といふとて  
あやういふとて、集ねて或編といふあうきたるのちの  
字よるとまみじのものこの字ねらあ、度大の穉りて  
天の善物大よ、度き心よう。この字、那粒の穉りて  
村ねりも又多く集ふ心とあてむら。度大をむと  
ま、いふと集は方この字と集ふ心此二字をけし  
よ、この字をう母字の通う様にしてあこの字の下  
然とていふの字、いふは空虚の穉りて浮きあや

空虚といふ。鬼神ともあふか、穉きものねとも  
和くくふ。丹はあ、い、遊、ひ、大、空、の、あ、う、お、て  
ま、い、微、妙、乃、ま、茶、ね、ら、い、て、編、の、字、と、あ、ひ、と  
和、割、分、も、ま、ま、と、ま、ま、か、い、も、つ、つ、い、ふ、の、字、よ  
こ、よ、い、の、字、か、い、も、つ、つ、ま、い、己、登、の、ら、茶、め、て  
息、ね、ら、い、心、より、茶、い、て、い、ま、い、ま、あ、ら、ね、ら、い、か、や、い、た  
か、い、つ、つ、て、別、と、大、格、分、も、い、の、ね、ら、い、又、卯、ま、ま、つ、ね  
の、ま、い、も、い、の、い、の、実、ね、ら、い、い、つ、つ、あ、ら、ね、ら、い、別、は

行ふも有る。言ひ出さるの刻。ひふぬ。或は有る  
人の名集り。歌又の名もとのきく。外有る。よる  
集ふの記。おぼゆる。世にあり。事なり。げん  
ふふ。前の刻も。け假名。今を。つ。ま。い。え。氣  
の。い。ま。め。て。息。か。ら。も。つ。も。集。今。い。ふ。乃  
た。と。め。も。昔。息。の。た。び。あ。い。ま。も。今。い。ふ  
の。ま。集。福。も。根。元。の。ま。と。も。も。し。も。音。ぬ。る。三。字  
ぬ。か。ら。後。事。ぬ。く。ま。て。た。い。い。成。立。集。ぬ。る。た

昔あの一け。浮ぬると。刻。一。め。ま。字。の。い。も。今。ぬ  
も。な。け。ま。も。ま。い。ま。ぬ。か。ら。の。義。に。め。て。行。ぬ。る  
刻。ぬ。ま。は。ん。ぬ。る。い。め。け。ぬ。る  
又。四。母。字。の。通。り。め。て。海。む。名。も。有。る。も。と。く。は。谷。や  
し。假。名。の。二。字。あ。つ。さ。た。の。換。の。通。り。め。て。下  
く。い。ひ。仍。る。ま。の。字。う。り。か。の。さ。か。し。て。い。ふ。は  
則。母。字。の。通。り。ぬ。る。か。の。字。ま。の。字。も。い。ま。お。は。い。氣  
靈。又。圓。満。の。字。め。て。者。ま。ま。が。氣。立。の。り。ぬ

乃うけほちる方田満の真ありてまろく。三川  
の形は形も。谷は田形も形也。うけけ石やうめて  
海幸なり。いと甚く或は受得ある前也。和  
刻は甘多ふものなり。けは至て古切の形なりともいへ  
ぬ。糸ふたり。水必氣より徹受る。けは瓜免きまな  
と又中印形ひてけは瓜洋く。下秘く

一片假名の字。二の字の。百五方別。左の末に

伊呂半仁保四徒  
知利奴流遠和加  
與多礼曾門称奈  
良牟字困乃於久  
也末氣不已縁天  
安州幾涌妙美身  
惠比毛世須

寛延四辛未年七月日記之

北畠永以

一いろは假名字正文左へ通

山 呂 波 仁 保 四 止

知 利 奴 苗 在 利 加

与 た 礼 尊 門 祿 奈

良 武 宇 為 乃 於 久

也 未 計 不 己 衣 互

安 左 矣 由 妙 美 之

惠比母世寸

そよつりの侍と云事有右と字いつとのいろは傳

れも二字違方一の字ハ四つハの字ハハの字ハ

妙好り仍そりの字ハぬ長と加して書事ありそは

別妙の字ハ字ハなるた好り

寛延四年未年七月日記之 北島永次

一古漢母楠痕といふ者両面を以漫然の軍用計

策の用ふ事あり

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document, written on aged, yellowed paper. The text is arranged in several lines, though the characters are difficult to decipher due to the script and fading. The paper shows signs of wear, including creases and discoloration.



